

日々全てが「授業」そして「授業を語る会」を経て、協働研究を深めてきた

誇りある滝山小学校の研究を「伝統」にしていこう

～ 協働研究を深め、高まりあうチームをめざして～

平成21年度

校内研究概要



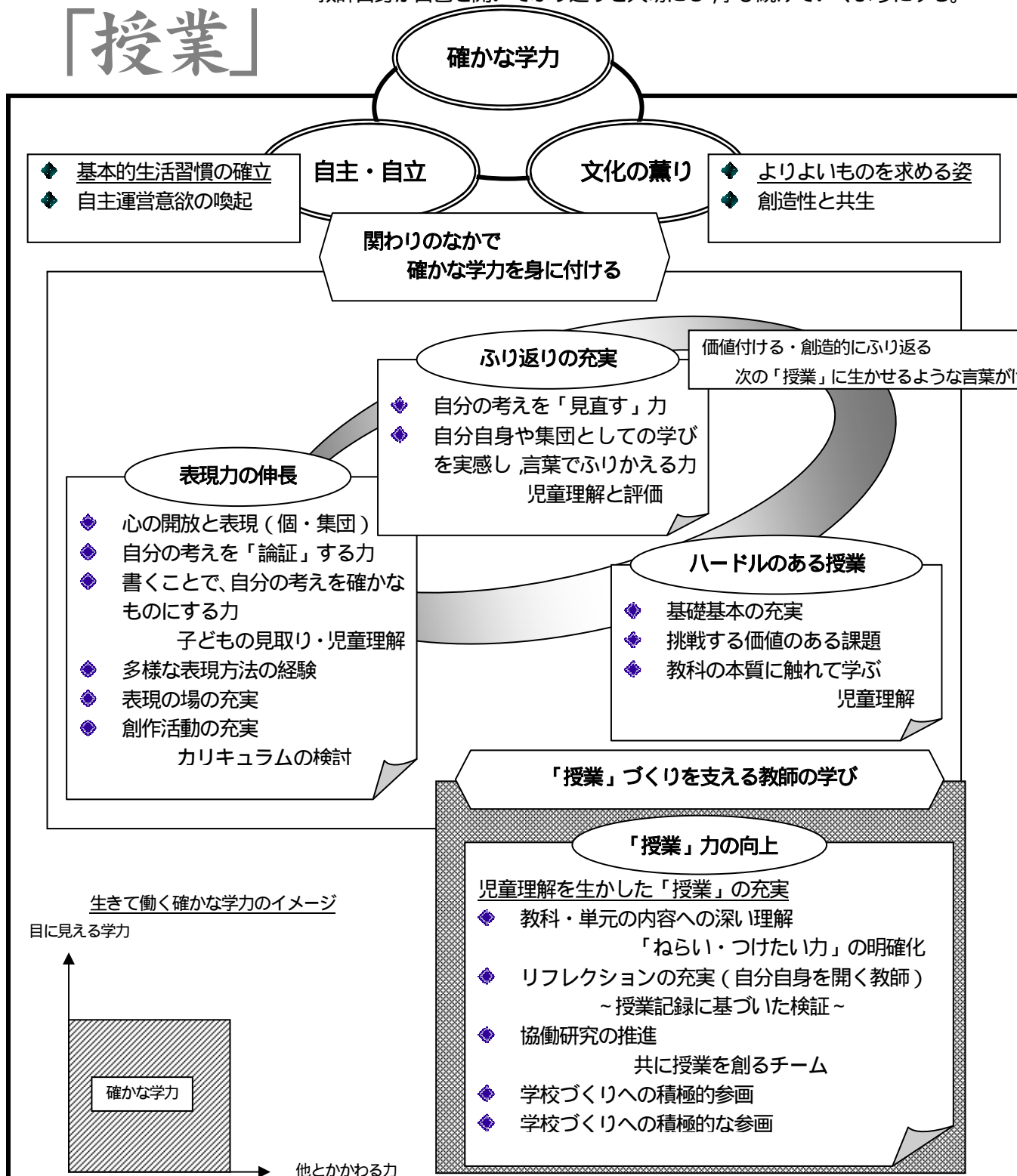
山形市立滝山小学校

1. 基本的な方針

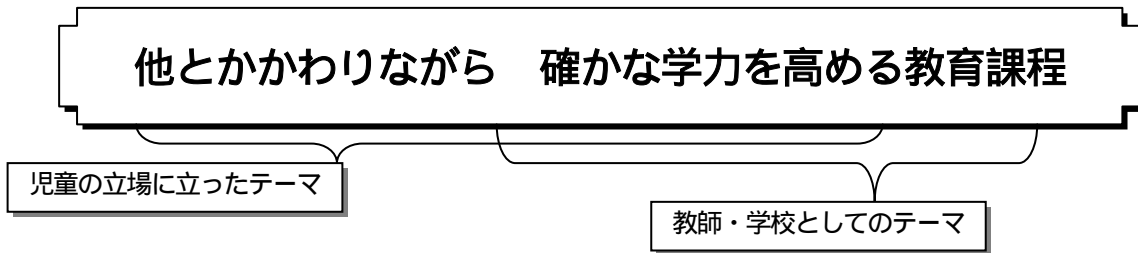
これまでの研究の方針を継続していくとともに、教育課程のねらいを踏まえ、実践を重ねていく。

- 目に見える学力とともに、それを生かす「他とかかわる力」を伸張していく。
 他とのかかわりのなかでこそ、将来にわたって生きて働く確かな学力を身に付けることができる。
～表現力に視点をあてて
- 教育課程全体を通した活動すべてを「授業」と捉え、子どもたちの学びを形成していく。
- 「授業」は子ども理解に始まり、子ども理解に終わるという理念のもとに、
 子どもたちと「授業」づくりに臨んでいく。
- 「授業」づくりを支える『教師の「授業」力』も視野に入れ、
 教師自身が自己を開いてふり返りを大切に、学び続けていくようにする。

「授業」



2. 研究テーマについて



3. めざす子どもの学びの姿

他とかかわりながら学び続ける子ども

かかわりのなかで確かな学力を育むことで、将来にわたって生きて働く学力を身に付ける子どもを育む

そのために一人一人に求める姿は

- 自分の考えをもち、意志を決定できる子ども
- 心を開いて豊かに表現することができる子ども
- 自分をふり返し、自らの生き方に生かすことができる子ども

自分の考えを持ち、意志を決定できる子ども

他と主体的にかかわる子どもを求めていくうえで、一人一人の子どもが自分なりの考えを持つことは、大前提となってくる。また、その考えがより主体的であり、他とのかかわりのなかで選びとったり、自らの考えを確立したりすることで、よりよいものをめざす姿勢も生まれてくると考える。

自立自立へとつながる主体的な意志を持つ子ども

「授業」のなかで、意志を決定するのは子どもであり、われわれ教師は、その決定する材料を子どもとともに構築していかなければならないと考える。

心を開いて豊かに表現できる子ども

自分の思いを表現する方法は多様にある。しかし、そのもととなるものは、自分の心にあることを素直に表現する姿勢である。つまり、心を開いて表現しようとする、心を開きたくなるような集団を形成すること（心を開いて聴く集団であること）がかかわりのなかで学びを構築していく基となる。

そのためには、表現したくなるような言葉をかけること、期待感を持って子どもに対することなどの力量が求められる。また、子どもが相手の話をしっかり受け止めそれを自分事として考えようすると、相手にさらに細かく尋ねようとする。伝えようとする側も、尋ねられることでさらに自分の考えをより確かなものに構築することになる。かかわり合いの中からこそ、より豊かに表現する必要が生まれてくるのである。友だちとつながり合いながら語り合うことを、好ましく感じる児童集団を育てていくことが望まれているのである。

自分をふり返し、自らの生き方に生かすことができる子ども

自らの学びを自らでふり返し価値付けていくことは、成長を明らかにする上でも大切になってくる。また、自尊心を高めるとともにさらに次の「授業」、学びに向かう意欲を喚起することとなる。加えて、次の学びに向かう課題意識を持つことでその学びはさらに大きく確かなものとなっていくと考える。この繰り返しのよって、自らの生き方を構築していく基盤を培っていくのではないだろうか。

従って、わたしたち教師は、終わったことを反省したり完結したりするふり返しを求めるのではなく、次の学びへと続く創造的なふり返しを仕組んでいくことが求められてくると考える。

そしてそれは、わたしたちのリフレクションのあり方にも同じように反映させていかなければならないのである。

4. 研究の内容・方法について

『本年度の主な研究の内容』

上記のような子どもの姿を求めるためにわたしたちは何をすべきなのか、それは

深く、確かな児童理解に基づいた「授業」づくり

多数の目で児童理解を進め、語り合い、深く追究し合うチームによる協働研究を進めていきたい。

昨年度は、学年だけでなく、学年部・教科部を中心に、縦横にかかわりあうチームで授業作りに取り組んできました。そして“チームになる”心地よさを楽しむことができました。

しかしそれは、時間的な負担もあり、必ずしもプラス面ばかりではありませんでした。また一方で、教師間で思いを同じくすることの難しさもありました。

わたしたちは、自分の学年の児童・先生という意識ではなく、滝山小学校の子どもたちを育てる教師集団という意識を強くし、「深く、確かな児童理解に基づいた授業づくり」を滝山小の伝統へと成熟させていきたいものだと考えます。

学年や教科が違ってても、児童理解に基づく「授業」づくりの精神は共通するという手応えを感じることができました。教科指導だけでなく、すべての教育活動に同じ思いで取り組んでいけたら・・・

「チーム滝山」の一員である「プロの教師」として、児童理解に基づいた生徒指導の機能を生かす授業で、子どもの姿を変容させていきたいものだと思います。

そこで・・・

・学年を中心に、縦のつながりも意識した児童理解と「授業」づくり

(国語科・算数科・図画工作科を窓口にして)

教科を絞り、学年を中心にしながらも、学年だけにとどまらないチームで、子ども理解に基づいた「授業」づくりに臨み、各部ごとに授業提案を行っていく。(全校研・学年部研、一人一授業)

また、授業リフレクションで児童理解を進めるとともに、教師の「授業」力の向上を図る。

授業リフレクションでは、詳細な授業記録をもとにした、児童理解を柱に進めるようにする。(児童理解と教科の本質 個別支援計画の活用)

年間計画をたて、授業研究会を計画的に実施していくように努める。

・学級を開く児童理解と「授業」づくり

授業研究会の本時だけでなく、そこに至るまでの道筋を複数の目で見取りながら、事前研を積み重ね児童理解を深めていく。全校研の授業づくりに関わる他の教師・他の学級での授業提供も小研としてとらえることを可とし、チームでの授業づくりを推進する。

教科主任を中心に窓口教科以外の教科にも挑戦し、教科部を機能させていく。(「研究授業」ではなくとも、新指導要領で新しく変わる内容の授業を開き合い、研修し合う。英語学習など)

・児童による学校づくりの推進(「わたしたちの学校はわたしたちの手でつくる」という意識の向上)

「みんなで創る運動会」の継続・児童会活動の見直しと充実・縦割り活動の見直しと充実

ゆくゆくは、どの学年のどの教科の授業においても、子ども理解という視点でしっかりとした授業分析ができる校内研究、教師集団になっていきたいと考えている。

『研究の方法』

- ◆ 「授業」研究会の実施（国語科・算数科・図画工作科を窓口にして）
教科を絞り、学年を中心にしながらもそれにとどまらないチームで、子ども理解に基づいた「授業」づくりに臨み、各部ごとに授業提案を行っていく。（全校研・学年研、一人一授業）
- ◆ 「授業を語る会（全校研）」の計画と実施
年間4回、他校の先生方にも案内を出し、「授業を語る会」を実施していく。
1回2授業・各学年および支援学級が1授業ずつ提案するようにする。
- ◆ 講師の先生による授業提案や指導
7月初旬頃、「授業を語る会」と抱き合わせで計画する。
- ◆ カリキュラム及び求める子どもの姿の検討（学習指導部と連携しながら）
学校経営概要・各教科の計画への反映と具体的な手立ての検討
- ◆ 新学習指導要領の学習と実践交流・実践内容のふりかえり
- ◆ 英語を中心とした外国語活動に関する研修・実践交流
- ◆ 研究会、研修会への積極的な参加 児童理解を授業に生かしている学校
- ◆ 児童会活動の充実、縦割り活動の充実
- ◆ みんなで創る運動会の継続（5年次）

EX. 1年生国語の「授業」づくりに関わって

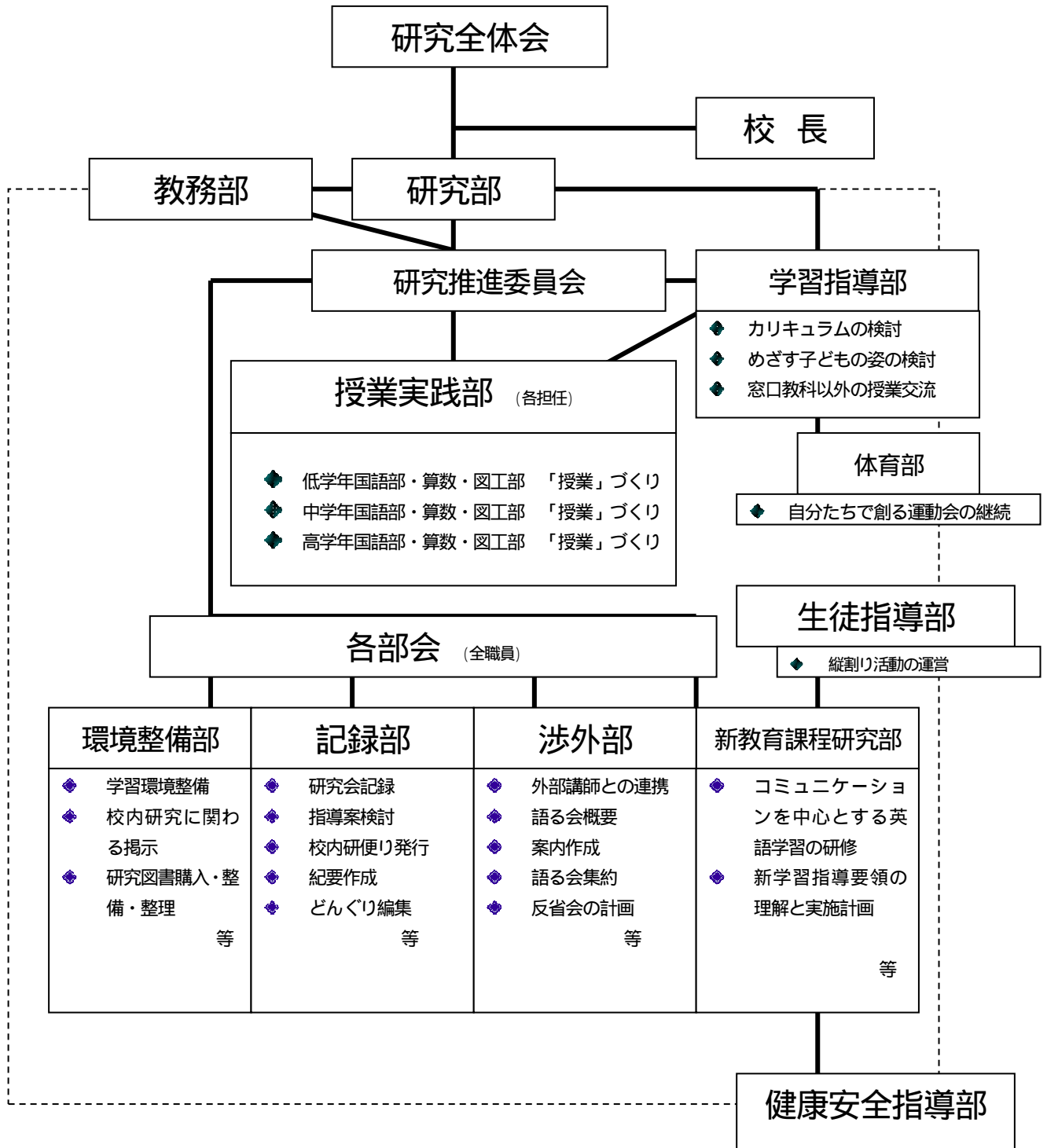
学年	国語実践部	算数実践部	図工実践部
1年	低学年国語「授業」実践部 ○ ○	低学年算数「授業」実践部 ○ ○	低学年図画工作「授業」実践部 ○
2年	○ ○	○	○ ○
3年	中学年国語「授業」実践部	中学年算数「授業」実践部	中学年図画工作「授業」実践部
4年			
5年	高学年国語「授業」実践部	高学年算数「授業」実践部	高学年図画工作「授業」実践部
6年			
特別支援	特別支援「授業」実践部		

「授業を語る会（全校研）」は、学年+2年国語「授業」実践部で授業づくりを行う。（実線）

小研は、学年で授業づくりを行う。（点線）

各部の人数配分は、必ずしも均等にならなくとも、その学年で行う全校研の教科を厚くすることも可。

5. 研究の組織



6. 年間の見通し

月	主な内容 ・「授業」づくり	新教育課程研究部	環境部	記録部	渉外部	学習指導部	
担当	平・加藤孝	鹿野・鈴木憲 向田 各学年から1～2名	丹野 各学年から 2名	阿部・安達 各学年から 1名	教頭・平・太田	学習指導部長 各教科主任	
4	研究部の組織 研究計画				研究予算の検討 研修計画	・新カリキュラム及び めざす子どもの 姿の検討 各教科運営計画 への反映 ・学習環境整備 (備品点検・購入)	
5	研修会の実施 ・高洲南小学校 (児童が創る授業) ・堀川小学校 (児童理解の先進校)	英語学習の計画	掲示計画 5月の掲示 研究図書を選定	記録陪読計画・分担 記録方法の検討 指導案・支援表検討	「授業を語る会」外 部講師の選定 語る会概要計画・案 内発送		
6	中旬 「授業を語る会」 2・3年		6月の掲示	紀要計画	語る会概要計画・案 内発送		
7	初旬 「授業を語る会」 4年	新教育課程学習会	7・8月の掲示				・教科部主催の授業 の交流
8			掲示計画確認	語る会指導案集約	語る会概要計画・案 内発送		
9	下旬 「授業を語る会」 1・6年	英語学習の実施	9月の掲示				
10	28 教育委員会計画指導		10月の掲示		語る会概要計画・案 内発送		
11	下旬 「授業を語る会」 5年・支援		11月の掲示				
12		新教育課程学習会	12月の掲示	紀要・どんぐり原稿 依頼	語る会まとめ		
1			1月の掲示			・カリキュラム及び めざす子どもの姿 のふり返り	
2			2月の掲示	集約・印刷・製本			
3				配布			

7. 心がけたいこと

すべての活動が「授業」であると意識しています。

教師も子どもも「ふり返し」を大切に考えています。

「授業」は子どものものという意識をもっています。

子どもも教師も、共感的に「聴く」ことを大切にしています。

教師も子どもも、日常的な言語環境に気をつけています。

子どもの姿から学んでいます。

「授業」は、子ども理解に始まり、子ども理解に終わると考えています。

教師も常に変わろう、前進しようとしています。

子どもも教師も、自分たちでつくりたい授業像を共に考えようとしています。

昨年度末にふり返ってみて、「なかなか心がけることができなかった項目もあった」という私たちの実態でした。私たち教師の意識改革をすることで子どもの姿も自ずと変わってくるはずです。これらのことを、学校全体の教師集団が、「同じ意識を持ったチーム」として心がけていけば、必ず子どもは変容してくると、私たちは信じています。